

実習報告（関係機関実習）

学力向上・進路保障の実現にむけた支援の在り方について —システム構築とデータの活用法からの考察—

江口 若香子（教育経営探究コース：現職教員）

1. 探究実習のテーマと設定の理由

少子・人口減少社会が進む現代日本では、教育の分野でもその対応策が模索されている。生徒数減に関しては、教育活動、学校の運営・管理の変容、さらには生徒の興味・関心や進路等の多様性の広がりへの対応等が今後の大きな課題となってくることが挙げられている。「少子化圧」とも呼ばれるこの現象は現任校においても見られ、幅広い学力層の生徒の入学や、進路選択の多様化につながっている。また、入試改革に伴う「多面的な学習指導の導入」など新たな学びが求められる一方で、教員の勤務時間の長さや教材の準備・事務作業にかかる業務負荷は大きく、肝心の授業準備ですら十分に行えていない状況が生じてきている。これは、生徒の学び・進路を保障する上で憂慮すべき事態である。

このような文脈において、生徒の学力を保障し、進路実現に向けて動くためのシステム研究の必要性を見出すに至った。「生徒の納得のいく進路実現のために何ができるのか」を探究すべく、大学院の2年間における研究テーマを『「学力保障」「進路保障」にむけたシステム構築とその活用の在り方について』とした。本研究では学校活性化委員会を中心に、学力向上の手立て、進路意識の開拓、進路実現に向けた取組の在り方を探究していきたい。そこで探究実習の研究テーマを、「学力向上・進路保障の実現にむけた支援の在り方について」と設定した。

2. 探究実習の研究目標

実習では、佐賀県教育センター情報課、唐津市教育委員会において、生徒の学力向上における具体的な支援の在り方を探ることを目標とした。各実習先における詳細な目標は以下のとおりである。

(1)佐賀県教育センター情報課

教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる成績処理技術及び分析法の習得を目標とした。さらに学力向上に向けたICT教材の特性の理解を通し、校内での利活用の在り方を探りたい。また、教育センターの役割や組織、業務内容について知見を広め、学校現場との連携の在り方を考察する。

(2)唐津市教育委員会

小中高と連続した視点で子どもの学力育成の過程を捉え、学力向上に向けた指導の在り方を考察する。さらに、義務制における学習指導の在り方を踏まえ、高校に求められている役割について視野を広げて確認し、校内でビジョンを共有する手法を研究する。

3. 探究実習の概要

関係機関2か所での実習は、前半10日間を佐賀県教育センター情報課で、後半10日間を唐津市教育委員会でそれぞれ行った。

教育センターにおいては、専門講座の聴講、所員・研修員による技術指導、タブレットを使った模擬演習などを通し技術力の向上に努めた。また、「データ活用システム設計・構築にむけて」「生徒情報データベースを活用した校務処理の効果的な在り方について」「現任校の課題解決に向けた教育セン

ターとの具体的な連携の在り方について」など意見交換を中心に考察を深めた。

唐津市教育委員会では、「義務制における学習指導の現状を知るには現場に実際に赴くことが一番である」という市教委員会の判断のもと、小学校2校、中学校1校の計3校にそれぞれ3日間の訪問・観察を行った。授業の様子や学校運営の在り方などを細見し、現場職員と意見を交換し考察を深めた。また、実習最終日には管轄内中学校への学校訪問の同行を行い、教育委員会、教育事務所の業務についても学んだ。

4. 探究実習の成果と課題

探究実習の研究目標に沿って、主な成果と課題は以下のとおりである。

(1) 学力向上につながる支援の在り方について

義務制における教育実践の場を見ることで、学びのスタイルが大きく変容してきていることを肌で感じることができた。子ども達を主体とした授業を組み立て、他者との関わりの中での自己実現を図れるように、日々の教育実践の中で組織的に研究が重ねられていることを知った。また、開発的生徒指導の根幹である「出番・役割・承認」のチャンスがたくさんある「学び合い」の実践も参観した。やる気をもって学びに向かい、自己肯定感を育てている子ども達の姿を目の当たりにし、開発的生徒指導の効果の大きさを感じた。子ども達がこのような学びを経て高校に入学してきている事実を踏まえた上で、高校に多い「一方向の授業スタイル」を見直す必要性を強く感じる。これは授業だけの話ではない。学校行事や日常生活のどこにおいても、出番・役割を仕組み、きちんと承認をすることで、子ども達の成長はあらゆる場面で見られるであろう。前向きに学習に臨み、充実した高校生活を送るための自己肯定感の育成に向けて、活性化委員会を中心に具体的な方策について検討していく必要がある。

(2) 進路保障につながる支援の在り方について

校務の効率化及び進路指導に生かすデータベースの作成法について、Excelの有効な活用法を中心に専門的に学ぶことができ、研究推進に向け大きな力をつけることができた。また、デジタルポートフォリオの可能性について検討できたことも大きな成果である。今後大きく変わる大学入学者選抜に向けて、学びの足跡や意欲を記録するポートフォリオは必要性が高まってくると考える。このことを踏まえ、学習用PCを活用したOneNote版ポートフォリオ案の作成を行い、進路保障に向けたシステム構築について検討することができた。また、生徒へのデータ配布や回収について、個人情報保護の視点などで、その可能性や限界などについて様々な検討事項があることを所員の方々と共有できた。これらの事項を学校の現状とすり合わせ、教育センターとの連携を図りながら、教育活動に組織的に組み入れていくことが今後の課題である。

(3) 次年度の学校変革実習に向けて

子ども達は様々な環境の中で、自分の置かれている状況を自分でコントロールする力を得て、他者との協働の中で自己現実を果たすことができるようになる。この力がこれからの未来を生きる子ども達の幸福につながると考える。そこで、多様な人々と協働する態度の育成も含め、自ら学びを深めていけるような学習の場を作っていくことがわれわれ教員に求められていることではないだろうか。学びの在り方は、今大きく変わろうとしている。探究実習で得られたこれらの知見を踏まえ、「学習意欲を引き出すために何ができるのか」「生徒の伸びを支えるためのデータの活用法とはどのようなものなのか」「生徒の進路意識の開拓に効果を上げる、デジタルポートフォリオはどのように構成し、活用すればよいのか」など具体的に問いを立て続け学校変革実習に臨み、研究・実践を深めていきたい。